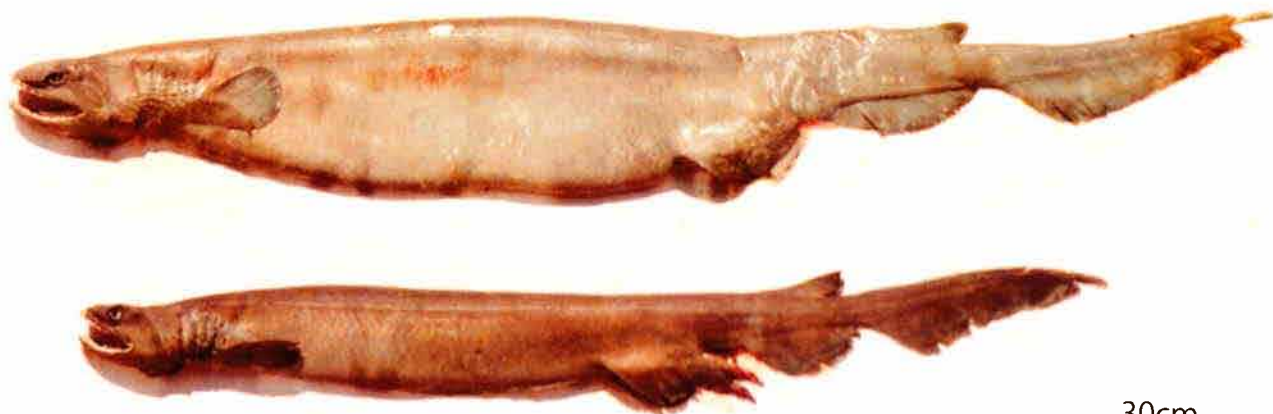


駿河湾の深海魚 (2)

ラブカ (その1)

久保田 正・佐藤 武



30cm



上 : ラブカの雌 (上) と雄 (下)
1977年5月混獲

左下 : 頭部
1977年5月混獲、雌、全長158cm

右下 : 前面から見た上・下顎
1977年4月混獲、雄、全長127cm

ラブカは、軟骨魚綱板鰓亜綱カグラザメ科に属し、1科1属1種の特異な形態をしているサメです。その分布は広く東部太平洋、東部大西洋、インド洋、東シナ海、南日本など世界中の約1000m層までの深海に生息しています。ラブカの先祖は約4億年前の古生代デボン紀に現われ、クラドセラケ (Cladoselache) と呼ばれる化石種と似ている点が多いことから、学問的に貴重な存在として有名なサメの1種です。また、生きている化石 (遺存種) とも呼ばれています。その似ている特徴は、1) 口が体の前端に開いていること 2) 側線がひと続きの溝のようになっている 3) 歯の形が原始的である 4) 鰓孔の数が6対である 5) 鰓が鰓孔からはみ出ていることなどです。6対の鰓孔にある鰓の1部のヒダは赤味を帯びて美しい色です。このことから本種を英名ではFringed shark (ヒダ飾りのあるサメ) と呼ばれています。

日本近海の主産地は深い湾として知られる相模湾と駿河湾です。特にここ駿河湾では春季にサクラエビ中層曳網、底刺網、小型底曳網などで混獲されることがあります。地元漁業者は昔からカイマンリョウまたはカイマンリュウと呼んでいてそれほど希少な存在ではないが厄介なサメとして知られています。その理由は、他のサメには見られない前面に口が開いており、その上・下顎の歯には3本が山型に尖った多数の歯が列をなしているの生きていた個体は大変危険だからです。ここではサクラエビ漁で獲れた個体の写真を紹介します。

このようなラブカの歯の状態から見て餌生物は、何でも食べ、硬い物でも噛み砕くように思われますが、実際には軟らかい生物特にいろいろな種類のイカ類や小さな魚を主食としています。空胃率が高いことから慢性的な空腹状態にあると思われる。

駿河湾内から採集されたラブカ的全長範囲は、雌が125.3~181.0cmそして雄が117.8~159.3cmで、雌の方が大きく、雌雄の比率はほぼ1対1です。雌は全長約140~150cmの間で成熟し、一方雄は全長約110cm以下で成熟します。雌の子宮内にある受精卵数および胎児(仔)数は、多くは2~10個体の範囲にあつて母体の成長に伴って若干増加する傾向にあります。この卵には黄味が多く栄養がたっぷり含まれていま

す。